

「戦国武将たちの南蛮船誘致合戦：銀の島日本に関する情報から」

岡 美穂子（東京大学大学院情報学環准教授）

はじめに

1511年に東アジアと東南アジアを結ぶ交易港であったマラカを征服したポルトガル人が、その市場で目撃したアジア産商品の中に含まれる「日本産」商品（交易者は琉球人）の主たるものは「金と銅」であった。しかしながら、1530年代後半には、アジアの港町で日本産の銀が目撃されるようになる。その直後に起きたポルトガル人の日本来航は偶然の産物ではなく、まさに「銀を求めて」のものであったと考えられる。さらにポルトガル人達は、より多くの銀を入手できる港を求めて、日本の港を移動していった。

I. 1540年代前後の状況

東南アジアで流通する日本産商品の交易者の主力は琉球人→この頃、琉球人がもたらす銀は日本産であることが知られ始める。

琉球へ日本産商品を齎すのは薩摩商人であることが認識され、初期のポルトガル人来航が薩摩の港（山川・坊津）に集中。種子島への「漂着」も、ポルトガル人を乗せた華人船の船乗りたちがその近海を知っていたからこそ、可能であったのかもしれない。1544年には華人船に乗って、ポルトガル人もスペイン人（パタニ発）も薩摩へ到来した。ポルトガルの歴史書に記される「1542年」という年代は、「terra incognita 未認識の土地」をめぐるポルトガルとスペインの競争の中で、「必然的な数字」であったとも考えられる。実際この時期、スペイン人は日本との交易（その先には領有も？）に期待しており、1544年に薩摩の港を訪れたスペイン人ペロ・ディエスから「銀の塊」を入手したエスカランテ¹は、スペイン領ヌエバ・エスパーニャ副王宛に、「見本」として送付した。

II. 南蛮船の薩摩入港記録

1544年 小瀬寝²ポルトガル人の乗るジャンク船5隻+琉球からさらにポルトガル人が乗るジャンク船。

1546年 山川 ジョルジ・アルヴァレス

1546年 薩摩 アルヴァロ・ヴァス *坊津である可能性を後述（アンジローとの関連）。

1546年 薩摩（山川？）ドン・フェルナンド・（メネゼス？）

1552年 鹿児島 ドゥアルテ・ダ・ガマ³

1560年 泊（坊津） マヌエル・デ・メンドンサ⁴

1561年 阿久根 アフォンソ・ヴァス（アフォンソ・ヴァスは阿久根が拠点のポルトガル人海商）⁵。阿久根にて、襲来してきた異国船集団（倭寇 or 海寇）に殺害される。

¹ モルッカ諸島を目指して太平洋を渡ったピリャロボス艦隊の商務員。モルッカ諸島でポルトガル人の軍隊と衝突して捕縛された後、解放される。

² 岡本良知『16世紀日欧交通史の研究』（増補改訂版、原書房、1974年）をベースに情報を追加。

³ ドゥアルテ・ダ・ガマは、1551年から1555年まで日本に毎年来航。豊後1回、平戸3回、不明1回。

⁴ 岡本前掲書では、この来航は記されず。

⁵ 「阿久根には、アフォンソ・ヴァスと称するポルトガル人がおり、己の船で冬を過ごしていた、、、」（アルメイダ、1562、10、25）

1561年 泊（坊津）⁶ マヌエル・デ・メンドンサ マカオへ戻らず、坊津の泊で越冬。

*同年、平戸で宮の前事件（松浦家臣 VS ポルトガル人）発生。

*同年（永禄4年9月28日）、島津貴久、イエズス会インド管区長宛に、宣教と貿易船誘致の書状を送付。

1561年 山川 ポルトガル船1隻⁸

1562年 泊（坊津）マヌエル・デ・メンドンサに前年より滞在

*同年、島津貴久、インド副王宛書状を送る。

◇1552年以降、薩摩への来航が不明瞭なのは、イエズス会が薩摩を離れたため＝史料がない。加えて、1550年代には大友領豊後と平戸への入港が増加。イエズス会を庇護（この時点では、大友義鎮はキリシタンではない）。

◇1561年前後、薩摩の島津氏からの南蛮貿易を目的としたイエズス会の誘致作戦が展開される。

◇平戸宮ノ前事件（カピタン・モール含むポルトガル人が殺害される）により、平戸での交易中断。

Ⅲ. 1562年のルイス・デ・アルメイダの動向（1562年10月25日付書簡）

◇1561年末から1562年5月頃、イエズス会の日本布教長トルレスの命を受けたルイス・デ・アルメイダ、薩摩に滞在。鹿児島で島津貴久にインド副王宛書状を書かせ、公式南蛮船の来航港を薩摩に定める方向へ。マヌエル・デ・メンドンサの働きかけ（後述）。*この時点では、薩摩が公式南蛮船の入港地として既定路線であった。

・1562年6月、アルメイダ、豊後へ戻る。

◇同7月、横瀬浦へ派遣される。前年に大村純忠から豊後のトルレス宛に宣教師派遣依頼。アルメイダ到着時、すでに横瀬浦にはペドロ・バレット（カピタン・モール＝公式）の船が入港済み。

横瀬浦の住民のキリシタン化、諸税の免除などが条件として提示されるも、すぐには決まらず。

◇同8月、豊後から布教長トルレスが、大友義鎮の書状を持って、大村へ到着。アルメイダの驚愕ぶりから、晴天の霹靂であったことが分かる。トルレス自身が、大友義鎮の大村純忠宛書状を持参したことにより、横瀬浦開港が決定的になる。

◇大友義鎮の書状の内容は不明。なぜ自領の豊後府内や支配下の博多ではなく、大村領への南蛮船来航を支持したのか？

→推測：博多は戦乱に巻き込まれやすい（周辺の武将や毛利氏も狙っている）、豊後府内へ到着するには島津勢力が徘徊する南海から豊後水道に入る（南から）、あるいは狭い関門海峡を通らねばならない（北から）ためか？インポート（輸入）機能を大村領に集中させ、上方へのディストリビューション（分配）機能を博多・豊後府内に設定する？→九州北部商業ネットワーク構想？

Ⅳ. ポルトガル人船長マヌエル・デ・メンドンサ

1560年、イエズス会宣教師バルタザール・ガーゴ、坊津からマカオへ向かう途中、海難に遭う
船艀：マヌエル・デ・メンドンサのジャンク船（ポルトガルのナウ船と同程度の大きさ）

- ・10万クルザード（約10万両）の銀と奴隸（女性を多く含む）を積載。
- ・乗員・乗客（奴隸含む）は200名以上のキリスト教徒とシナ人と異教徒
- ・坊津を1560年10月27日に出港。
- ・マカオ近海で嵐に遭遇、舵が壊れて海に落ちる。

⁶ マヌエル・デ・メンドンサが2年にわたって来航した「泊とまり」を、岡本良知氏は「京泊」として記すが、これは坊津の泊港のことであろう。参考：岸野久『ザビエルと日本』吉川弘文館、1998年、268頁。

⁷ 『イエズス会日本報告集』第3期2巻、同朋舎、1998年、73～74頁。

⁸ 岡本前掲書では、この来航は記されず。

・ボルネオ近海まで流される。船内設備を悉く海中に放棄し、最後（三つ目）の舵を取り付けて、海南島に漂着。

・メンドンサは1561年から翌年にかけて泊港に滞在。

・メンドンサ、薩摩領内での布教活動誘致のため、1561年11月、豊後のコスメ・デ・トルレス布教長のもとを訪問。即刻、ルイス・デ・アルメイダが薩摩に派遣される。

◇結果として、大友義鎮の思惑が優先され、公式南蛮船の貿易港は大村領に定まったが、私貿易船は薩摩にも時々入っていたかもしれない（実証不可能）。

V. ポルトガル人私貿易船の来航と銀

◇「石見」にポルトガル人来航を示す史料の発見

【1587年7月4日付 フィリピン司教ドミンゴ・デ・サラザールの同年フィリピンへ到着した日本人に対する質問録と付随書類（以下「サラザール文書」と称す）】⁹

・石見国言及部分：「そこには多くの銀がある。当地へはポルトガル人たちが来航する Provincia de Yvani [H]Ay mucha plata, aqui van los portugueses」。

・安芸国言及部分：「安芸国 当国の王は上述の（石見）国のすべての銀を享受する」＝石見銀山の銀が毛利氏の掌中にある。

・史料の性格：1587年にフィリピンのスペイン人支配者らによって、日本に関する報告としてまとめられ、本国へ送られた¹⁰。

・情報源は同年に日本からルソン島へ到来した40人の日本人商人¹¹。

◇10人の日本人の署名¹²。

・3名の代表者①吉近はるたさ（別名バルタザール・ガルナル、豊後出身）¹³、②長野よやもん加分里（グラビエル／ガブリエル、都出身）、③山本よそじろう寿安（博多出身）。

④たかばにえもん（別名ドン・ファン・デ・ベラ、博多出身）、⑤原田じえもん・パブロ（都出身）、⑥渡辺ゼロニモいえもんしろう（豊後出身）、⑦あぶらや〔油屋〕やはちろう（アンドレ・ゴンサルヴェス、平戸出身）、⑧ジョアチン・デ・ベラ（日本名不詳 備後出身）、⑨やなぎや〔柳屋〕フランシスコげんえもん（堺出身）、⑩ぎみんそレオンいさじろう（博多出身）が花押と共に記名¹⁴。

⁹ Archivo Historico Nacional, Ms. Diversos-Colecciones, 26, N.9.

¹⁰ 1585年以降、日本船によるルソン島マニラ通商開始。松浦氏、大村氏などの船がマニラへ赴いた。

¹¹ 最初にこの史料の翻刻を発表したのは、地図学者の中村拓。中村氏はこの記述を読み取れず、以後のこの史料を用いた研究でも知られずにあった。この史料の写本は東洋文庫に一種類存在し、日本語訳はこの写本をもとに発表されている。ヨハネス・ラウレス SJ「日本とフィリピン諸島との間の初期の交通に関する一古文書『キリシタン研究』第五輯、吉川弘文館、1959年。的場節子氏は、ラウレス論文を参照しつつ、原史料の確認もおこなっている。的場節子『ジパングと日本 日欧の遭遇』吉川弘文館、2007年、174～202頁。

¹² ラウレス、的場の先行研究は11名と読んでいたが、ローマ字、日本語部分ともに、10名である。タカバニエモンに相当する「どん寿安」と「どべら」を2名分に捉えたためであろう。

¹³ この時期、平戸でドン・バルタザールといえば、壱部正治を指したが、壱部正治は籠手田氏出身であるので、豊後生まれではない。

¹⁴ ここに挙げた表記は、和文、スペイン語（ローマ字）を組み合わせたもの。人数の問題同様に、ラウレス、的場の研究では、和文、スペイン語共に複数の誤読が指摘され、なおかつ史料に全く書かれない当て字を論文文中に加えたことに拠り、かなりの混乱が生じている。この部分に関して、スペイン語部分の翻刻を記すと以下ようになる。Don Juan de Vera, natural de Facata, Tacava Niemon, ya Don Baltasar Garnal, natural de Bungo, ya Pablo Faranda Ziem[on], natural de Meaco, ya Jeronimo Batanambe Jemo[n]xero, natural de Bungo, ya Andree Gonçalvez Ambraya Yafachiro, natural de Firando, ya Joachin de Vera, natural de Meaco, ya Francisco Yananguia Gueniemo[n], natural de Sacae, ya Juan Yamamoto Iosogiro, ya Leon Giminsu Ixajiro, natural de Facata... スペイン語音を現代カタカナ化すれば、異なる読み方となるが、原文の和文とローマ字

先行研究では、この日本人一行は松浦氏からの派遣と考えられてきた¹⁵。

→来航者の出身地の多様性を勘案すると、松浦氏のみ意向で彼らがマニラへ送られたのではなく、秀吉の意向がそこにあったと考えるべき¹⁶。

- ・⑤の原田じえもん・パブロとは、1591年、秀吉の外交使節としてマニラへ派遣された原田喜右衛門のこと
- ・④のタカバ・ニエモンには、「ドン」という敬称が付く＝武士。秀吉の家臣寺沢広高（1591年より長崎奉行、後に唐津藩主）の家臣には、高場氏という一族が存在¹⁷。
- ・堺の有力商家柳屋¹⁸の名前が見られ、同じく堺の豪商油屋の縁者と思しき平戸の油屋。
- ・豊後出身の渡辺ゼロニモいえもんしろうは、大友水軍の真那井渡辺氏の縁者¹⁹。

大半はマニラへ到る船上で長野ガブリエルによって洗礼を授けられた俄キリシタンであった。長野ガブリエルは、イエズス会の関係者であったと記されるが、日本イエズス会のイルマンや同宿のリストにその名前はない²⁰。

◇来航の目的

- ・ルソン島のスペイン人の状況偵察²¹。
- ・1586年、築城中の大坂城で秀吉は大友宗麟、続いてイエズス会副管区長ガスパール・コエーリョ一行を引見し、朝鮮出兵の構想を語る。
- ・秀吉が九州征服を視野に入れ、その先を見越して情報収集を始めた時期がちょうどこの頃。11名の日本人の名前には、豊後、博多出身者が目立ち、薩摩出身者はおらず。
- ・1587年旧暦3月末（新暦5月）、秀吉が九州平定のため、小倉入り。一行のマニラ到着は新暦6月（旧暦5月）であったことから逆算すると、九州で布陣中であった秀吉が、ルソンへの渡航歴のある松浦氏等の情報に接し、自らマニラへの偵察団を派遣した可能性も。

***この話の続きは、本の方で！**

おわりに

現時点では推測の段階であるが、大村領を対外貿易港にすることは、大友義鎮の発案であった可能性がある。それは博多や豊後府内の地政学的な状況を勘案したものであった（九州北部商業ネットワーク構想）。その後、西日本の海外貿易に関わるネットワーク整備の構想は秀吉の天下構想の中に包摂されていたのではないだろうか。

を比較した結果、現代スペイン語ではなく、いわゆるローマ字読み（ポルトガル語に近い）が適当と思われたため、そのようにカタカナを充てた。

¹⁵ 的場前掲書、192～193頁。

¹⁶ 1585年にマニラに来航した日本人について話すフィリピン総督サンティアゴ・デ・ベラのメキシコ副王宛書簡では、小西行長がマニラのスペイン人との通交に関心があることが記されている。高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』岩波書店、1977年、102頁。

¹⁷ 秀吉の家臣寺沢広高の家臣に高場順世（進士兵衛）なる人物がおり、後に福岡の糟屋郡須恵で南蛮流の眼科医となった。青柳種信、広渡正利編『筑前國續風土記拾遺』3巻、文研出版、1993年、905頁。

¹⁸ 武野容子『藩貿易史の研究』、1979年、121頁。

¹⁹ 渡辺は和文の花押上部分に「源」の字を入れている。真那井渡辺家の男子は「源」の一字を用いる慣例があったようである。福川一徳「戦国武士の系譜に関する一考察」『法政史学』32巻、1980年。

²⁰ 五野井隆史『徳川初期キリシタン史研究補訂版』吉川弘文館、1992年、263～291頁。同『日本キリシタン史の研究』2002年、367～373頁。

²¹ 的場氏は、この一行がフィリピン諸島の現地人がスペイン人に抵抗するための武器を密かに渡した可能性を論じているが、当事者の人名の不一致が未解決である。的場前掲書参照。